

『わたし』という存在

松江市立東出雲中学校 三年生の作品

「もう少し男らしくしなさい」「もう少し女の子らしくしなさい。」よく聞く言葉がけです。「らしく」って何だろう。そんな疑問が私の中で渦巻いています。

私は小学生になったころからスカートをはくのが好きではありませんでした。かわいいものや服装を好まない「女の子」でした。何か、違和感を感じながらだんだんと成長し、今年で15歳、中学3年生になりました。

「男らしく女らしく」とは日本社会が作った「社会的性別（ジェンダー）」のことだと私は思います。社会によってつくられた男性像、女性像は、職業や家事などの固定的な役割分担を決定します。生物学的な男性には「率先して体力のいる仕事を」「かわいい恰好やメイクに興味を持つのは変だよ」、生物学的な女性には「家事に子育て」「長い髪に化粧は礼儀」こういうステレオタイプの考え方に私は、大きな疑問を持つようになりました。だからと言ってトランスジェンダーやXジェンダーでなくてはいけないというわけではありません。社会が作った男性像、女性像にとらわれず、自分の趣味趣向に従って自分の思うように生きようとする考え方こそが今、求められています。

私は、中学生になって、自分の趣向に「普通」とは違う感覚を持ち始めました。感覚ですが、自分の「普通」とは何なのか、考えるようになりました。学校では、スカート(制服)をはき、友達とも何事もないかのように話をします。でも、違和感を感じることはたくさんあります。例えば、集会の時は男女別に入場し、男女別に整列します。教室の机の配置が男女市松模様で、委員会別の名表で男の子の名前が先であるなどです。身近なところでの疑問はこんな風に始まりました。

私は、たぶん「FTM」。トランスジェンダーの一つで、心の性別と体の性別が一致していません。私の中で性別は不明です。

学校以外でもこんな経験がありました。よく言われる「トイレ」の問題です。私服の時の私は、たぶん外から見たら「男の子」。友達と女性用トイレに入ったときに、あとから入ってきた女性に、まじまじと見られトイレのマークを確認されたこともありました。多目的トイレの使用がLGBTs用であると社会的に認知されているわけではないので、オールジェンダートイレがあると安心するのになあと、本当によく思います。

このように私が女性ではない自分を意識するようになってから、私の周りになんの疑問もなく語られたり、決められたりしていることがあまりに多いことに気づきました。自分の本当の性を隠し、周りに合わせてしまうこと、それは、今の自分には、生きていくうえで仕方ないことだと思っていますが、心がどんどん苦しくなることも確かです。男女を問わず、誰もが自分に正直になり、本当の自分の「私の生き方(マイ・ライフ・スタイル)」で気楽に生きていけるような世界になれるといいと思います。

今年「LGBT理解増進法」の成立過程で、様々な議論がなされました。議論の過程で、

当事者である者には、胸が痛む発言もたくさん聞かれました。当事者の思いに近づくことの難しさや現状の認識を変えることの難しさを感じました。

男女別に分けられた席、トイレ、社会的にはレディースデーや女性専用車両など、既存のものにはそれぞれそのようにしている意味や背景があるのだらうと思います。また、日本は、「みんな同じだと安心、違うと不安」という意識が強い国だと思います。だから、「らしさ」が固定されてしまうのです。スコットランドの男性の正装はスカートでも、日本で、男性のスカートは想像もつかないのが現実です。これまでにないことや違うことを厭う考え方が強いのも確かです。私も、みんなと同じようにしていれば、心は苦しいこともあるけれど、人から変な目で見られない安心感があるのも確かです。小さなことでも変えることは大きなエネルギーが必要なのでしょう。でも、実態が変われば、現状維持がいいとは限らないということ、大きな声で伝えたいと思います。

私と同じような違和感を感じている人はきっと身近なところにもいるのだらうと思います。しかし、「その話」ができる環境に、まだありません。そういう意味で、LGBTsは、少数派であるようにいわれます。少数派を大切に、と言っているのではありません。マイノリティーもマジョリティーも関係なく、誰もが自由に自分を語ることのできる社会になるために、今私はこんな中学生がいることを知ってもらいたいと思っています。「自分が着たい服を着たい」「男子、女子と分けなくてほしい」と自分の意思で考え、発言できる人が増えることが近い将来の日本にとって必要なことであり、女、男でわけようとする前に、多くの人の本当の声を聞いてほしいです。